

愛知川町におけるキリスト教伝道  
—近江ミッションを中心に—

山本 潤

愛荘町歴史研究 第2号 別刷  
愛荘町教育委員会 文化振興課  
2009年2月



# 愛知川町におけるキリスト教伝道

— 近江ミッシェンを中心にして —

山本 潤

一

明治三八年（一九〇五）、近江八幡の地に一人のアメリカ人が降り立った。滋賀県立商業学校（現 滋賀県立八幡商業高等学校）の英語教師として赴任してきたウィリアム・メレル・ヴォーリズである。彼は英語教師の仕事の傍らバイブルクラスを開始、後に近江ミッシェン（近江兄弟社と改称）を設立して建築設計やメンソレータム販売などの事業を基に滋賀県下へのキリスト教伝道を行なった。

近江ミッシェンによる伝道の特徴として、「近江国ニテ教派ニ關係ナク、基督ノ福音ヲ宣伝」すること、「新教諸派ニヨリ伝道サレザル地方ニ福音ヲ宣伝」すること、「主トシテ田舎伝道ニ努力」することなどが挙げられる<sup>1)</sup>。愛知川町は近江ミッシェンの拠点であった近江八幡とも近く、街道筋に存在する農村地域であることを考えると、愛知川町における宗教問題を考察するにあたっては寺社や民俗信仰と共にキリスト教をも視野に入れておかねばならないであろう。本稿では近江ミッシェンの伝道雑誌『湖畔の声』から愛知川町におけるキリスト教伝道の記録を整理し、宗教史研究の一助とするものである。以下、本文と共に『湖畔の声』の記事をまとめた(表①)、適宜参照されたい。

二

近代における滋賀県下へのキリスト教伝道は彦根が最も早く、横浜でジェームス・カーティス・ヘボンに学んでいた旧彦根藩医中島宗達<sup>2)</sup>が明治五年（一八七二）に彦根へ漢訳聖書を送ったことを始まりとする。その後は彦根、長浜、八日市、八幡、大津、草津などでも伝道が行なわれているが<sup>3)</sup>、現段階では明治期における愛知川町へのキリスト教伝道は見出すことが出来ない。

近江ミッシェンの伝道では大正五年（一九一六）六月二十日にヴォーリズと吉田悦蔵が自転車伝道を行なった際、愛知川の水源地へ向かっているが、愛知川町を通過したのかどうかは不明である。『湖畔の声』から確認出来る愛知川町への伝道は、昭和五年（一九三〇）四月二三日に愛知川日曜学校を開校したとあるのが初見であろう。この時は浦谷道三、内炭政三が愛知川日曜学校の担当であったことが分かる。昭和五年（一九三〇）は滋賀県各地に伝道が進んだ年であったらしく、『湖畔の声』二〇七号には、

「今春は、伝道の春です。（中略）水口町のキリスト教会館も

建築中なり、堅田町のキリスト教会館も、いよく、秋迄には、完成することになりました。八日市に、今津に、木の本に、信楽郷に、高宮に、今年は、いよく手足を延ばしつゝあります。」

とあり、これらの地域と併せて愛知川町へも伝道がなされたのであろう。また、愛知川日曜学校を担当した内炭政三は自由メソヂスト神学校（現 大阪キリスト教学院）を卒業の後、近江ミッションに入って水口で伝道していたが、昭和六年（一九三二）に神崎郡旭村新堂へ転居し、能登川を中心とした地域の伝道を担当している。愛知川町への伝道も能登川を拠点として行なわれていたと考えてよいだろう。

『湖畔の声』二四一号に掲載された大崎治郎「近江ミッションのブライトシルエット」には愛知川町に存在した伝道所の様子が記されており、非常に興味深い。それによれば、内炭政三の家がある能登川では「付近の寺のお坊さん達が連盟を作って、立退運動をした」こと、愛知川町の伝道所は「中仙道にある民家を利用したもの」であること、吉田悦蔵と「町の有力者中村さん」が同窓であることが分かる。吉田悦蔵と同窓ということとは滋賀県立商業学校の時であろうか、推測の域を出ないがその可能性は考えられよう。また、昭和七年度の事業財団目録（史料①）及び昭和十三年度事業報告（史料②）には愛知川基督教教会館の記載があり、その規模や活動内容、会館が借家であったことなどが分かる。

昭和九年（一九三四）、近江ミッションは近江兄弟社と改称し、滋賀県下を七教区に分けることが定められた。当時の伝道状況から愛知川町は能登川教区であったと考えられ、同年、柴田五

郎が能登川教区主任となっている。また、昭和十年（一九三五）以降、愛知川基督教教会館も柴田五郎の担当であることが明らかである。

この後、戦争が激しくなるにつれて『湖畔の声』に掲載される伝道記録が少なくなってくるが、昭和十六年（一九四一）に行なわれた日曜学校の夏期学校へ愛知川町からも参加していることより、この時期までは愛知川町でのキリスト教活動が確認出来る。しかし、戦争の影響は刻々と迫り、ついに昭和十七年（一九四二）には「堅田、今津、水口野田各会館は堅田、今津、水口野田の各教会へ貸与」、「米原会館は米原町に県社会課を通して寄附」することなどが定められ、近江兄弟社は伝道事業の縮小を余儀なくされている。その時、愛知川基督教教会館がどうなったのかは確認出来ないが、おそらく、何らかの形でその難を受けているものと思われる。

現在、愛知川基督教教会館はどこにあったのかさえ不明であるが、愛知川町へも福音の「芥種（マスタード・シード）」は確実に蒔かれていたのである。

### 三

今回の調査により、愛知川町におけるキリスト教伝道の一端を明らかにすることが出来た。史料の収集と整理を中心に行なったため、内容に関する考察は出来なかったが、今後、愛知川町におけるキリスト教の問題を考える場合、いかなる人がキリスト教に関心を寄せたのか、また、伝道の方法や内容はどのようなものであったのかという視点が必要である。その際、既存宗教や社会的秩序との関係は常に意識されなければならないであ



『近江ミッション一覽圖會』  
愛知川講義所（近江ミッション圖書出版部 1931年）より転載

ろう。  
宗教を歴史の中で明らかにしようとする時、社会と宗教がいかに関係しているか、そして私たちにどうして宗教とは一体何なのかという問題と向き合わざるを得ない。これからも町史編さん事業を通して様々な人の「生き方」と出会いながら、自問自答して考えていきたい。

〔注〕

- (1) 『近江基督教伝道団綱領』（奥村直彦「ヴォーリス評伝 日本で隣人愛を实践したアメリカ人」港の人 二〇〇五年 九一〜九三頁）
- (2) 奥村直彦「近代日本におけるキリスト教受容と変容——近江地方の事例を中心に——」（『社会科学討究』一〇二号 早稲田大学社会科学研究所 一九八九年）
- (3) 『湖畔の声』一七〇号 二二六頁
- (4) 仏教とキリスト教の関係述べたものとして、新保満「近江における真宗教団と基督教団との対決——近江兄弟社調査報告 其一一」（『社会科学ジャーナル』三号 国際基督教大学社会科学研究所 一九六二年）がある。
- (5) 『基督教年鑑』昭和十年版 日本基督教連盟年鑑部 一九三四年 一五五頁
- (6) 『基督教年鑑』昭和十一年版 日本基督教連盟年鑑部 一九三六年 一五〇、二〇七頁愛知川基督教會館の担当が柴田五郎であることは『基督教年鑑』昭和十一年版〜昭和十六年版まで確認することが出来る。
- (7) 『湖畔の声』三三五号 二二〜二三頁  
（龍谷大学文学部史学科仏教史学専攻 卒業生）

〈付記〉

本稿を執筆するきっかけを澤田智幸氏（立命館大学文学部史学科日本史学専攻 卒業生）より頂いた。また、史料調査にあたり、神尾麻純氏（日本女子大学人間社会学部文化学科 卒業生）の多大なるご協力を得た。紙上を借りて厚く御礼申し上げる。

〈追記〉

『近江 愛知川町の歴史』第三卷（民俗・文献史料編）の七二二頁に「愛知川基督教講義所解散につき認可」が掲載されている。

「近江基督教慈善教化財団

(中略)

昭和七年度事業概況

昭和七年四月一日ヨリ

昭和八年三月卅一日マデ

(中略)

十三、愛知川基督教会館

幹事 二名

聖書信仰講話 毎週水曜日夜

特別講演会 四回

児童特別集会 四回

年額経費 金參百七拾円也

財団補助 金參百七拾円也

備考 幹事ハ兼任ニ附キ給料ハ含マズ

(中略)

近江基督教慈善教化財団

財産目録 (昭和八年三月三十一日付)

(中略)

十三、愛知川基督教会館 (愛知郡愛知川町)

動産総額 二一四・〇〇円

「近江基督教慈善教化財団

(中略)

昭和十三年度事業報告

一、会館

今津、米原、堅田、水口、野田の各基督教会館 (以上本財団所有)、

木之本、鳥居本、能登川、愛知川、安土、高宮の各基督教会館、及

び信楽、深清水、仁保、の各伝道所 (以上借家) 八幡基督教青年会、

近江兄弟社教育会館、近江療養院、近江兄弟社女学校、近江家政塾。

(以上本財団所有)

二、各会館に於ける事業別

米原、今津、水口、の各基督教会館 (宗教教育幼稚園、学術文化講

演会)、堅田基督教会館 (宗教教育、幼稚園、夜学校、学術文化講

演会) 野田、木之本、鳥居本、能登川、愛知川、安土、高宮の基督

教会館及び信楽、仁保の伝道所 (宗教教育)。

深清水伝道所 (宗教教育、託児所)

八幡基督教青年会館 (宗教教育、夜学校)。

近江兄弟社教育会館 (幼稚園、農村青年学会)

近江兄弟社女学校。

近江療養院 (療養院、宗教教育)

三、宗教教育

(中略)

又、愛知川 (大人四三回二三五名、小人三三回九二名)

表 ①

年月日	記事	典拠	備考
大正5年6月20日	「六月二十日、ヴォーリス吉田の両氏は朝四時から車上の人となり、愛知川の水源の方へ向はれました」	『湖畔の声』45号 P, 4	自転車伝道
昭和5年4月23日	「愛知川日曜学校 四月二十三日よりS・Sを開校、毎水曜日夜 生徒数三十名乃至四十名、八時より聖書研究会を開く、出席者六名より十名。浦谷、内炭両氏担任。」	『湖畔の声』210号 P, 42	
昭和5年12月23日	「近江ミッション各地クリスマス祝会日取 廿三日(火曜日) 愛知川伝道所(午後六時半)」	『湖畔の声』215号 P, 28	
昭和6年	「愛知川日曜学校 浦谷兄の応援のもとに集りが続けられ、四十名余の子供の出席者がある。」	『湖畔の声』218号 P, 40	
昭和6年2月16日 ～18日	「二月十六、十七、十八日の三日間、能登川及愛知川にて、芦屋の長谷川敷牧師を聘し、靈の恵豊かなる集会を催すことが出来ました。」	『湖畔の声』218号 P, 40	
昭和6年	「今度、内炭政三氏は神崎郡旭村新堂に住居され能登川、安土、愛知川、高宮の各地に、巡回伝道さゝることゝなりました。」	『湖畔の声』224号 P, 55	
昭和6年10月30日	「某工務店より金物愛知川町長より小学校奉安庫使用のインサルボードの注文あり。」	『湖畔の声』226号 P, 36	近江セールズ株式会社 雑貨部
昭和6年12月27日	「愛知郡愛知川町に向ふ。晚餐後講師及主催側の兄弟姉妹各自蠟燭とマッチを懐中して、同地公会堂に向ふ。土地柄によりては、演説妨害のため、電灯を消されることが、屢々あるからである。年末にも拘らず、ぎっしり満場、司会者内炭政三氏司会、吉田悦蔵氏、田舎謡歌論を、例のユーモアを混ぜて語られ並に賀川先生の紹介をもせらる。賀川先生は地方文化の精神的基礎と題して語らる。会衆三百名、同カード記入者二十五名であった。」	『湖畔の声』228号 P, 41 「近江伝道行脚記」	賀川豊彦の伝道記録
昭和7年3月23日	「愛知川安土高宮連合の礼拝を行ふ、(中略) 愛知川礼拝八名、日曜学校十四名、」	『湖畔の声』231号 P, 44	
昭和7年4月30日 ～5月1日	「四月三十日五月一日愛知川にて、お話と映画会を催す百三十名内外。」	『湖畔の声』234号 P, 36	
昭和7年5月11日	「五月十一日愛知川会館、彦根高商校長矢野貫城先生の『宗教と道徳』と題する講演あり。」	『湖畔の声』234号 P, 36	
昭和7年5月14日	「五月十四日より、毎土曜日夜踏傍集会をなす」	『湖畔の声』234号 P, 36	
昭和7年5月15日	「五月十五日愛知川ミユキ公園にて、能登川、愛知川の連合野外礼拝を行ふ。子供八十名大人二十名彦根の竹内教師の奨励『宗教と母性愛』あり。」	『湖畔の声』234号 P, 36	
昭和7年6月25日	「六月二十五日午後ヴォーリス博士の講演会を、能登川工業試験所及工場にて開催、夜愛知川にて、『現代社会の進むべき途』と題して語らる来会者三十余名。」	『湖畔の声』234号 P, 36	
昭和8年2月4日	「楽しい昼食が終ってから、愛知川の伝道所へ行くことになった。吉田さん夫妻に内炭牧師と私の四人は、自動車で、内炭牧師の家に行った。月五円の家賃だといふ内炭牧師の家は、立派なものだった。この家の周囲には、百万長者の近江商人が住んでいて、キリスト教などは一步も近づけないとの事である。家を借りる契約後、付近の寺のお坊さん達が連盟を作って、立退運動をしたさうである。昭和時代にこの有様だ。「愉快ぢゃないか、戦争はこれからだよ」吉田さんは大元氣。強将の許弱卒無し。夕食後、自動車にて愛知川の伝道所に行く。農村伝道は都会伝道よりも金が必要でそれほど手取早く、効果のあがない事を知った。愛知川の伝道所は中仙道にある民家を利用したものであった時間が早いので、街道を見て廻り、吉田さんの同窓である町の有力者中村さんを訪問する。吉田さんも、一人前以上の牧師だ。少しも、ちっとしていない。訪問すべき処は、ちゃんとして、釘をさしてをく処などは敬服の外はない。集会を終へ、汽車にゆられて八幡に戻ったのは、十一時頃であった。」	『湖畔の声』241号 P, 25 大崎治郎「近江ミッションのブライトシルエット」	

昭和9年	「滋賀県下を七教区に分けて、神の国の工作をする。」	『湖畔の声』255号 P, 42	愛知川は能登川教区
昭和10年12月6日	「十二月六日(金)夜は愛知川会館にて二十数名の真面目なる公衆に福音を伝ふ。七名の求道者恵の座に進み出で、各自其罪を懺悔し救主イエスを信ずる信仰を告白し罪赦されたる事を信じ、感謝しつつ散会せり。ハレルヤ」	『湖畔の声』275号 P, 45 川辺貞吉「近江伝道旅行記」	川辺貞吉の伝道記録
昭和11年5月31日 ～6月7日	「去る五月卅一日より七日に至る一週間はペンテコステ特別伝道週間として湖畔にある各地会館、今津堅田、能登川、愛知川、八日市、武佐、水口、木之本にて、ヴォーリス博士、吉田悦蔵氏、佐藤安太郎氏や教務部の方々を動員して毎夜講演会が開かれました。」	『湖畔の声』281号 P, 46	
昭和11年6月1日 ～10日	「自転車で行脚される紙芝居の小野一良氏来援愛知川、八幡、八日市、武佐大林、野田、堅田、洗足舎、深清水、今津などで六月一日より十日まで各地SSを巡回して下さいました。」	『湖畔の声』281号 P, 46	
昭和13年	「此度近江兄弟社の各地会館の内に近江八幡教会の支教会を設置する事となり、今までの会館の会員はそのまゝ支教会員となり、兄弟社の会館の主事である各地の諸先生に各その支教会の責任を負って頂き、協同一致、近江伝道の為に大いに働くつもりです。支教会になる場所は米原、木之本、能登川、愛知川、水口、堅田、今津、八日市、武佐、野田、近江療養院の十一ヶ所です。その内で伝道の為に働いて頂く先生方も全部で十人余りもあり、他には一寸類の無い教会になりませう。」	『湖畔の声』303号 P, 31	
昭和15年	「山田寅之助氏を地方伝道委員長にお願いして左の十四ヶ所に伝道を継続して頂くことになりました。米原、木ノ本、今津、堅田、水口、能登川、愛知川、高宮、鳥居本、武佐、仁保、野田、安土、丸山。」	『湖畔の声』333号 P, 22	
昭和15年	「日曜礼拝平均出席数 愛知川 六、日曜学校 愛知川 四五、」	『湖畔の声』336号 P, 23	
昭和16年8月4日 ～6日	「八月十二、十三日は八幡教会日曜学校の夏期学校が教会で開かれ、国民学校の生徒百五名の参加がありました。八月四日から六日までは、八幡附近に点在している野田、仁保、安土、能登川、愛知川、武佐、八日市、などの小さい農村日曜学校の美しい協力で八幡教会を会場として開かれた。」	『湖畔の声』343号 P, 22	日曜学校夏期学校